年報筑波社会学　第16号（2004），122～126頁.

《書評》

D. メイナード 著，樫田美雄・岡田光弘 訳
『医療現場の会話分析――悪いニュースをいかに伝えるか』
勁草書房，2004年，238頁，3045円.

五十嵐　素　子

本書は、エスノメソドロジー（以下 EM）・会話分析の方法を用いて医療コミュニケーションを考察してきた、Douglas W. Maynard 氏（Wisconsin 大学 Madison 校）による単著、Bad News, *Good News: Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings.* Univ. of Chicago Press（2003）の抄訳である。EM・会話分析の方法によって行われた海外の諸研究は、これまで継続的に紹介されてきたとは言い難い。原著が出版されてから1年足らずで本書が翻訳されたという迅速さをまずは評価したい。

訳者である樫田・岡田両氏は、EM・会話分析の研究方法論を用いて保健医療と福祉の領域を研究フィールドにしてきた。翻訳の迅速さの背景には、こうした訳者の立場からの明確な意図がある。彼らは EM・会話分析の知見が、現在の医療・看護系の領域の要求に応えることを意図して、原著を翻訳したという。「いま対人サービス業化がすすみ、主としてその変化に対応するための、対人コミュニケーション能力を充実させるための教育改革が大規模になされつつある医療・看護系の領域に対しては、その応用価値がすこぶる高いと思われた」（p. 185）。「今回は、医療現場をはじめとするニュース伝達の実践者・教育者の方に多く読んで頂きたいとおもって訳出部分を選択している」（p. 187）。

本書は、こうした訳者の意図に沿ってその構成が大幅に編集されている。「紙幅の関係で、医療を中心とする臨床の場を扱った部分を中心に訳出し、2、3、5、6章の本文、および7、8章の全文が割愛されている」（p. 181）と訳者が述べるように、原著の各章の内容は、臨床の場を扱ったコーダ（章末部）を残してだいぶ割愛され、それに応じて章題も原著とは変えてある。その代わり、訳者解説と二つの付録によって内容理解が補われている。

原著と本書の題名とを比べてもわかるように、本書は、医療現場に関わる事例に力点を置いた構成になっているのである。

便宜の為に、以下に本書の章立てと原著訳出部分との対応を記す。

1章「悪い知らせ、良い知らせと日々の生活」（原著の1章：pp. 1－33）
2章「ニュースの受け入れられ方」（原著の2章コーダ：pp. 60－63）

3章「会話分析とエスノグラフィー」(原著の3章コーダ：pp. 79－87)
4章「ニュースを伝えるシークエンス」(原著の4章：pp. 88－119)
5章「悪い知らせとそれに伴う感情」(原著の5章コーダ：pp. 153－159)
6章「悪い知らせが隠される訳、そしてその明かし方」(原著の6章コーダ：pp. 185－199)
エピローグ「ニュースを告げる方法」(原著のエピローグ：pp. 247－253)

※なお、エピローグの後には、「訳者解説」(テキストの要点・原著者の略歴とネットワーク・主要業績の紹介およびその意義と受容可能性について) と、「訳者あとがき」(本訳書の読み方) に加え、付録1「トランスクリプトにする際の規約 (原著 pp. 255－257)」、付録2「会話分析への手引き (原著 pp. 259－263)」が付されている。

本書は医療現場という文脈に配慮しつつも、その狙いはあくまで「ニュース」が、いかに伝えられ/受け取られ、それとして経験されるのか、ということを明らかにする点にある。この課題に際して EM の方針に則りながら、現象学的アプローチやエスノグラフィー、会話分析の手法が採用されているのである。

だが本書は、医療現場に関わる事例を中心に編集されているため、こうした本書の意図や各章の論点、各章のつながり、方法論的立場が見えにくいものとなっている。このため評者の理解の限りで割愛された部分に言及しながら各章の理解を促すことにしよう。

1章では、「ニュース」という経験が日常的な現象でありながら、参与者の世界を中断し崩壊させ、再配置するという特徴を持つことを指摘する。そして、こうした特徴を明らかにするにあたって、現象学的アプローチを採用する利点と限界、EM の利点について述べる。そして事例に則し現象学の概念を用いつつ「ニュース」が参与者に「意味構成上の危機」とその「解決」、「回顧的解釈」をもたらすことを説明し、さらに後続章で分析される「ニュース」の諸特徴についても簡単に紹介している。

2章では、パースペクティブ・ディスプレイ・シークエンス (PDS) の分析を踏まえた上で (詳しくは原著参照)、「悪いニュース」を受け入れてもらうために、医者は「前触れ」の手法を用いるよう推奨している。また、診断という「ニュース」を伝えることに関して、誰が伝え・受け取るべきなのか、という社会的権利をめぐる倫理的問題が存在する点に注意を喚起している。

3章は、著者の方法論的立場 (会話分析と共にエスノグラフィーを採用する立場、詳しくは原著参照) からみて、エスノグラフィーや心理学による従来の「悪いニュース研究」がいくつかの課題を持つことを、診療場面の会話を例として指摘している。(評者からすると、本章で方法論の部分が割愛されているのは残念なことだ。Maynard 氏が会話分析の何を補完するためにどのようにエスノグラフィーを採用しているのかについて知ることは、

同様の現象を分析する上でも、方法論に関する議論を深める点でも重要な部分である。)

4章では、ある情報が、「ニュース」として産み出され、その位置価が決定されるのは、前触れ・ニュースを伝えるシークエンス（NDS）を通じた相互行為においてであることを事例に沿って分析している。コーダにおいては、診断における報告の「ニュース」としての価値が、物議をかもしている事例が取り上げられている。

5章では、人は「悪いニュース」の受け手となったとき、度を超して無反応になり、それから感情をあらわにすることを指摘している。これらの特徴は「悪いニュース」という状況を修復しようとする志向を相互行為上で示すものであり、伝え手による修復の手段としては「良いニュース」による脱出が用いられると分析する。

6章では、「良いニュース」と「悪いニュース」との間の非対称な扱われ方（良いニュースは直裁に、悪いニュースは隠されて伝えられる。詳しくは原著参照）を指摘している。「悪いニュース」を直裁に伝えている逸脱例として、HIV カウンセリングの会話例がエスノグラフィックな情報と共に分析される。そして、悪いニュースが隠されるのは、受け手の感情的な反応を抑えることが社会関係を維持するのに良いとされているからであり、直裁に言うのは、感情を放つことが社会関係を促進すると見做されているからだという。

エピローグでは、いかに効率的にニュースを送り届けるか、という問題について著者がどう考えるかが示される。著者はニュースを送り届ける確実な方法は、状況や受け手の行為に依存する以上無いものとする。だが蓋然性を高めるためのやりかたとして、「常識」を適切に用いることを提案し、その「常識」としての手順・心覚えのリストを提示している。

こうした内容を持つ本書には、訳者の編集意図に沿って「医療現場の会話分析」という題名に「悪いニュースをいかに伝えるか」という副題が付されている。

だが本書は、医療現場にとどまらず、また先行研究である「悪いニュース研究」の延長でもなく、良いニュースをも含めた「ニュース」の授受をめぐるコミュニケーション一般について明らかにするものである。このため、題名から「医療現場」において「悪いニュース」を告知する際の「心構え」の指南を期待した読者にとっては、肩すかしかもしれない。しかし、本書を丁寧に読み進むうちに、こうした期待は良い意味で裏切られたのだ、ということが分かってくる。というのも、ニュースの授受全般を扱うことで、悪いニュースの告知に焦点化した従来の心理学的説明に限定が加えられ、相対化されていることが読み取れるからである。例えば、一見、悪いニュースにつきものであるように思われるが、「意味構成上の危機」という特徴は、実はニュースの授受全般の特徴である（1章)。また「ニュース」であること自体も、またその「悪い」「良い」という位置価も、医者の判断や医療の論理によってあらかじめ決められるものではなく、相手とのやりとりの中である特徴の下にそのつど達成されるものである（4章)。そして、エピローグでは「伝えるものが『悪い』ニュースであるということを決めてかかってはいけない」と述べられているが、そ

れは「悪いニュース」を伝える際に、「処方箋」としてある「心構え」を持っていたとしても、その都度の実践上ではあまり意味を持たない、ということでもある。

また本書は、私たちが「ニュース」を取り扱う論理を辿る、という意味で、一貫してEMの方針が採用されている。ここではEMの方針に支えられた会話分析（ECA）がなされ、ナラティブ・データやエスノグラフィーで得た情報も適時使用されている。その意味で純粋な会話分析（pure CA）のように、シークエンスに焦点化した分析ではない。それゆえ、本書題名から「会話分析」を期待した読者にとって、一連の分析は方法論上の混乱として映るかもしれない。だがこうした方法は、PDSやNDSというニュース授受に関わるシークエンスがどのような業務の中で用いられているのかを説明するために採用されており（原著3章参照）、あるシークエンスがどのような社会関係の中で利用されているのかを説明する一方法として、示唆的である。

さて、評者は本書と方法論的に近い立場から教育現場、とりわけ知識の教授について考察を行ってきた。本書で明らかにされたニュースの授受とは、知識の教授と一見よく似ている。だが、評者の見解では、教授活動はその知識の正統性が教える側に存するような形で遂行されていき、そのことによって、「知識」なるものを協同的に産出することに焦点化した活動である。他方、本書によると、ニュースの授受とは、ニュースの伝え手と受け手の間においてそのニュースの位置価が決定される特徴をもち、教授活動と異なった焦点を持った活動のようである。もちろん教育現場においても、ニュースの授受は頻繁に見られる。では、それらはどのように使い分けられるものなのか。ニュースの授受とは、一体教育現場のどのような文脈の中に埋め込まれて利用されているのだろうか、と興味深い。

だが、こうした視点から翻ってみて、本書が医療現場の個々の実践に即し、ニュースの取り扱われ方を明らかにしているのか、と見てみると、残念ながら、そもそもの原著の意図から外れるゆえに、こうした視点が十分に展開されているとはいえない。本書は医療現場を分析しながらも、ニュースの扱われ方の一般的な論理を明らかにすることにとどまっている。このため、いくつかの問いが浮かんでくる。例えば、1章で述べられるように「意味構成上の危機」はニュース全般の特徴である。ならば、なぜ医療現場において「悪いニュース」を伝える仕方だけが問題となってきたのか。ひとつの理由は、5、6章で指摘されるように、「悪いニュースを受けた側」の感情表出の仕方が、医療現場における業務の展開の仕方に関わってくるからであろう。であるならば、もう一歩考察を進めて、カウンセリングや診断、看護といったそれぞれの業務の流れにおいて、PDSやNDSシークエンスがどのように用いられているのか、あるいは、個々の業務では、どのように感情のとり扱いが異なってくるのか、という視点からも探求が可能ではないだろうか。

本書は、医療・看護系の領域における、対人コミュニケーション能力を充実させるため

の教育改革にとっての「応用」が意図されている。確かに、2章では「前触れ」という手法が薦められているし、またエピローグでは「心覚え」が提示されてもいる。だが、本書出版に際して行われた講演会で、メイナード氏が強調していたのは、どのように実践するのかということは専門家自身が決めることであり、本書は、専門家が問題に対処するときに用いている実践的知識を明らかにした、ということであった。問題への処方箋を期待する見方からすれば、これは社会学者の任務の放棄として捉えられるかもしれない。しかし現象を規範的に記述せず（EM的無関心）、行為とその文脈の内的関係（相互反映性）を明らかにし、そこでの実践を理解可能なものにしている「人々の方法の論理」を示す、というEMのプログラムからすれば、これは頷首できる立場である。であるならば、本書は、医療コミュニケーションの決定版として受止められ、そのまま「応用」されるような書ではないのだろう。むしろ医療・看護系領域の教育改革という、今この時機において、研究者と実践者、教育者と実践者、あるいは実践者と患者といった様々な立場の人が、自身が関わっている医療コミュニケーションのありかたについて考えを深め、対話する共通の土台を与える「応用可能性」を意図された書であると考えたほうが良いのではないだろうか。

幸い本書は、医療現場の具体的な事例のおかげで、現場の業務のありように思いを巡らせることができる内容となっている。だが、こうした「応用可能性」の視点から考えれば、なおさら医療現場の多様な業務に即した形で、ニュースの取り扱われ方の論理が、明らかにされる必要があると思われる。その意味で本書は、さらなる探求可能性を持った出発点であり、本書を足がかりにした今後の研究の展開が待たれるところである。

〈参考文献〉

・「会話分析（エスノメソドロジー）は臨床にいかに貢献するかD. Maynard教授講演会から」、週刊医学界新聞 第2580号、2004年4月12日、医学書院
http://www.igaku-shoin.co.jp/nwsppr/n2004dir/n2580dir/n2580－06.htm#00
・樫田美雄　2004 「医療現場の会話分析から」、ジャミックジャーナル7月号、pp. 16－18、日本医療情報センター
・皆川満寿美氏ＨＰにおける本書への言及：http://homepage3.nifty.com/mmasumi/emca.html

（いがらし　もとこ／一橋大学大学院）